日本工業新聞

坂戸工作所⑦

北野靖志の「元気が行く」

現場リポート・元気印経営の秘密

会社を売り払ってでも済まぬ

銭を追うな②

油圧解体機メーカーの坂戸工作所は、終戦間際の一九四五年（昭和二十年）四月、坂戸誠一の父、正四郎がクレーンなど建設機械の修理業としてスタートした。

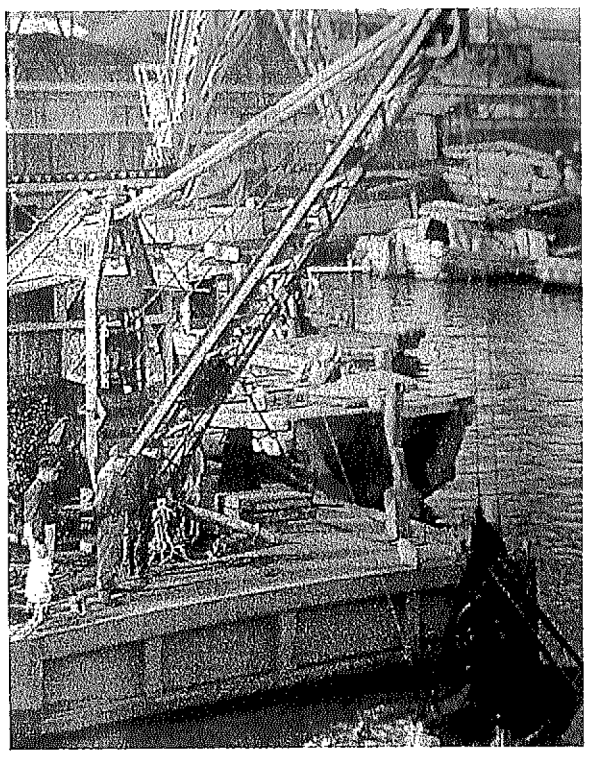
正四郎は戦前、大手建機メーカーの油谷重工の組立工場で働いていた。腕のよい組長として多くの部下からも尊敬される職人だった。ところが同年三月の東京大空襲で工場が全焼してしまい、会社から大阪工場への転勤命令を受けたが、「オレは江戸っ子だ。大阪なんて行けるか」と部下数十人を連れてさっさと独立してしまった。正四郎は東京・葛飾区の東四つ木に三百坪ほどの用地を取得すると、修理工場を建て大型クレーンの修理・サービスを始めた。もともと腕がたつだけに、注文も多く、結構繁盛した。正四郎はどんな小さな修理でも手を抜かなかったし、補修部品も手に入りにくい時代だったが、ありあわせの鋼材を使って器用に部品を作った。「修理は丁寧で、確実」と評判をよび、客によろこばれた。やがて修理に加えて中古クレーンの販売にも手を広げるようになり、さらに葛飾区内に五百坪の工場用地を借り増しした。六〇年ごろには社員数も五十人を超えた。仕事が増えるに伴い、場所が足りなくなり六四年には新たにクレーン車など大型機械の修理、保管用に千葉市・花見川の千葉鉄工団地にも三千坪の用地を取得した。主として修理と中古機販売を業務の中心にしていたが、時には技術を見こまれ、工場向けのクレーンや浚渫（しゅんせつ）船用の設備などの産業機械を手がけることもあった。順調に業容が拡大を続ける中、経営がぐらつくような出来事が起きた。

七〇年春、坂戸工作所は都内の中堅造船所、隅田川工業から新しいドックに備え付けるヤードクレーンの製作・据付工事を受注した。製品ができあがり、いざ試運転、据付工事の段になってスイッチを入れたとたん、クレーン本体が大きく揺れ、ついには据え付けていたのねじが吹っ飛んでしまった。製品をばらして会社の持ちかえり、徹夜で設計から見直してみたが、原因が一向につかめなかった。原因がわからないから対策も講じられなく、時間だけがむなしく過ぎていった。八月までという納期はとっくに過ぎ、台風シーズンが迫っていた。ヤードクレーンが動かなければせっかく建設した新造船所が動かない。「会社を売り払って、謝ったところで済むもんではない」―。

正四郎の眠れぬ日が続いた。

＝文中敬称略＝

（論説委員長）



≪坂戸工作所≫
社長＝坂戸誠一氏
住所＝千葉市花見川区
☎043・259・0131
業種＝解体機械製造業
資本金＝5720万円
設立＝1945年4月